



雑に扱われなかったもの

雑ではなかった、という感触だけが、ある。

それが何だったのかは、  
もう思い出せない。

ただ、  
雑ではなかった、という感触だけがある。

それは、  
優しさではない。  
配慮でも、理解でもない。

特別に扱われたわけでも、  
丁寧に説明されたわけでもなかった。

ただ、  
急がれず、  
消費されず、  
押し込まれなかった。

世界は、  
多くのものを雑に扱いながら進む。

言葉は急がれ、  
距離は詰められ、  
沈黙は省かれていく。

その中で、  
一度だけ、  
何かが、  
ずれなかった。

触れ方も、  
離れ方も、  
過不足がなかった。

雑に扱われなかったことは、  
救いてはない。

それでも、  
完全に雑なままではいられない感覚が、  
どこかにある。

期待にはならない。

ただ、  
基準だけが、できる。

それが何だったかより、  
どう扱われたかだけが、  
離れない。



Edition — 存在の芯  
別景：雑に扱われなかったもの

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026